

標高差利用と切り花貯蔵によるアリウム・ギガンチウムの出荷時期の延長法

(園試高冷地開発センター)

1. 背景とねらい

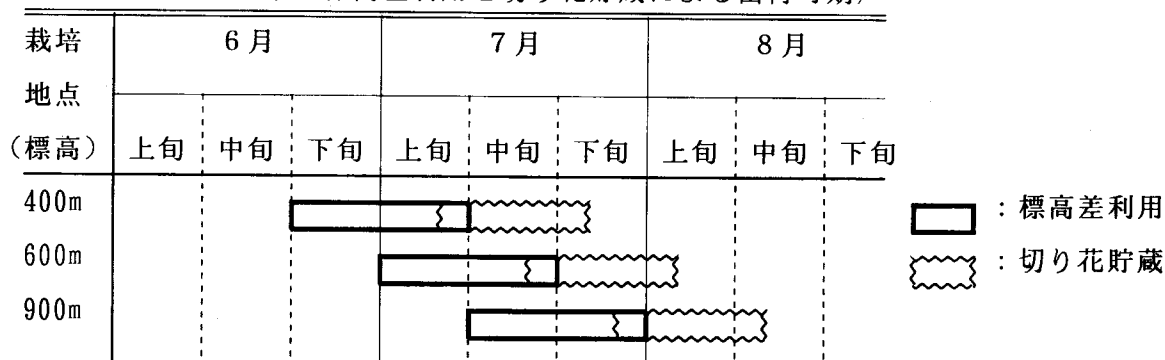
アリウム・ギガンチウムは比較的労力を必要としない作目で、栽培的にも高冷地に適している。しかしながら、抑制栽培などの開花調節技術が確立されていないため、同じ気象条件下では開花期が集中し、必ずしも有利販売に結びついていない産地事例もある。これまで、花と野菜のやまびこ産地育成営農試験の中でアリウム・ギガンチウムの標高差利用による採花時期について検討をしてきた。また、出荷時期の延長を目的とした切り花貯蔵法を検討したところ、成果が得られたので参考に供する。

2. 技術の内容

1) 出荷期の延長可能期間

標高400~900mまでの標高差を利用して栽培することにより、6月下旬から7月下旬まで40日前後の出荷期間が可能となる。さらに、切り花貯蔵との組合せにより8月中旬まで、ほぼ55日間の出荷期間が確保される。

〈県北地域における標高差利用と切り花貯蔵による出荷時期〉



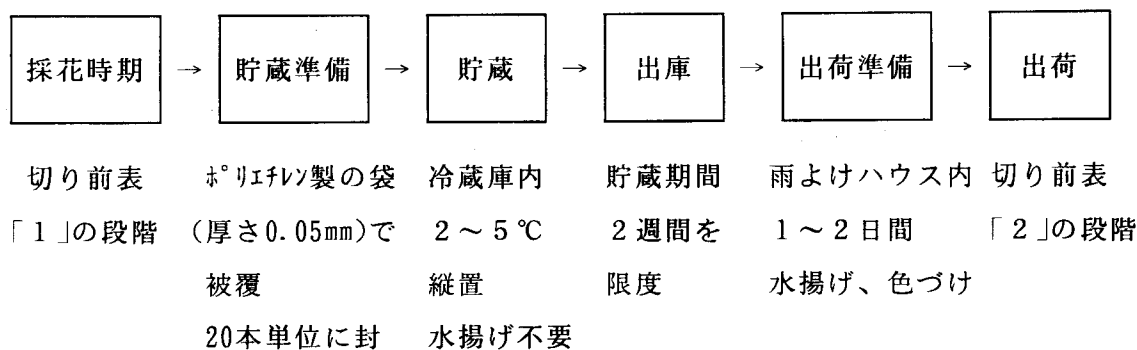
2) 地域別採花時期の推定

黒マルチ栽培での融雪時から採花始めまでの積算温度(日平均気温の積算)は860~900時間の範囲内となるため、地域別の採花時期が推定できる。

3) 切り花貯蔵法

- (1) 切り前(採花ステージ)は花蕾が着色後で、小花が開花前とする。切り前表のほぼ「1」の段階である。
- (2) 採花後、出荷規格より10cm程度長めに調整し、ポリエチレン製の袋(厚さ0.05mm)に入れ、封をして冷蔵庫(2~5℃)に貯蔵する。収穫物が雨などでぬれている場合、貯蔵には不適である。
- (3) 貯蔵期間は長くても2週間程度とする。
- (4) 出庫後、雨よけハウス内で水揚げを行い、色づけのため光線に当てる。ほぼ1~2日後に出荷適期の切り前表「2」の段階となる。

〈切り花貯蔵の作業手順〉



4) 適応地域 県下全域の高冷地、高標高地

3. 指導上の留意事項

- 1) マルチやべたがけ資材の開花促進効果は3～5日早だけであるが、規模の大きい農家で一部に導入し、出荷期や労力の集中を避ける。
- 2) 切り花のボリューム向上のためには土作りの効果が大きい。堆肥、石灰、熔燐などを施用し、品質向上を図る。
- 3) 切り花貯蔵の実施に当たっては市場とも協議しながら、出荷量の少ない時期を目標出荷時期とする。
- 4) 花蕾が着色する前に貯蔵すると花色が淡くなるため、適期に採花する。長すぎる貯蔵は花色の退色が進みやすいので、貯蔵期間を守る。
- 5) 次年度栽培用の球根は採花後、葉が枯れた時点の晴れた日に掘り取り、直射光線の当たらない、風通しのよい場所に貯蔵する。順調な花芽分化のためには茎葉枯死後の高温遭遇(20℃以上)が必要なので、日除けした雨よけハウス内が貯蔵場所として適する。

4. 試験成績概要

表1 栽培地点の標高と切り花品質、採花期(平成5～6年)

年次	標高 (m)	草丈 (cm)	茎径 (mm)	切り花重 (g)	採花期(月・日)			融雪から採花始までの 日平均気温の積算(℃)
					始め	平均	終り	
平5	430	107.2	12	92	6・30	7・2	7・5	891.0
	650	119.6	12	96	7・7	7・8	7・11	863.4
	900	109.7	12	107	7・17	7・19	7・24	896.7
平6	430	—	—	—	6・23	6・27	7・1	895.6
	650	—	—	—	7・1	7・5	7・8	903.1
	900	—	—	—	未抽台(葉のみ繁茂)			—